

1、

近畿 弥生時代後期 淡路島に西日本最大級の鍛冶工房村が現れた時代の2・3世紀

「鉄器は出土しないが急速な鉄器化が進行した「幻の鉄器」の時代」には疑問符

—鉄器時代のイメージ先行の弥生時代「北部九州以外 実用鉄器は まだ さほど普及していなかったのではないかな」—

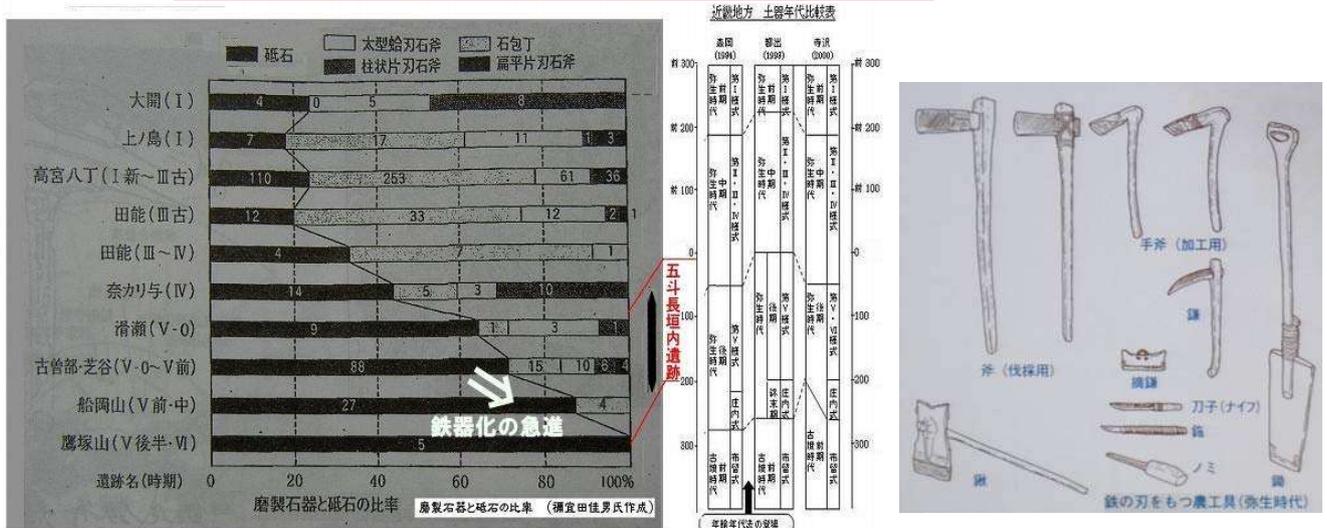
2011.3.5. by Mutsu Nakanishi

先月 掲載した「和鉄の道」 淡路島「弥生時代の後期の大鍛冶工房村 五斗長垣内遺跡」の記事の中で、「この五斗長垣内遺跡が出現した2・3世紀頃 近畿地方では 近畿での鉄器の集落遺跡からの出土は少ないが、石器から鉄器への急速な変革が起こったのではないかな」とする話を紹介した。

【和鉄の道 Iron Road】

弥生後期から卑弥呼の時代へ ベールを脱いだ「弥生の Iron Road 和鉄の道」 2010.11.21.

- ◆ <http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/10iron14.pdf>  
 ( <http://www.infokkna.com/ironroad/2010htm/iron6/1012gossa00.htm> )



弥生時代後期(1世紀後半~2世紀)には出土する石器のほとんどが砥石となり、石器製の農耕具の出土が激減する近畿地方においても この時代に実用鉄器の時代へ入ったことがうかがえる。(腐食等で鉄器の出土は少ないが、 鉄斧の柄が出土するなど実用鉄器の時代へ入ったことがうかがえる)

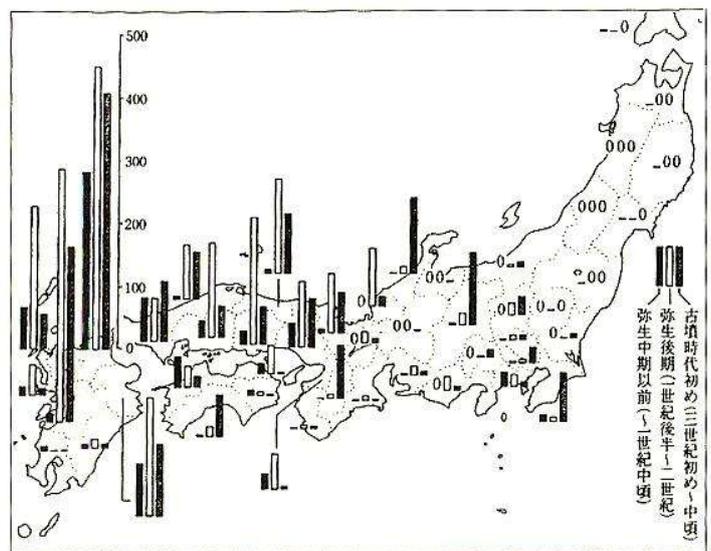
弥生の後期 近畿地方での鉄器需要急増の変化を示出土石器の急変  
 [補宜田佳男氏作成資料を基に整理して本図作成]

- 「 鉄器は腐食で土に帰ってゆくため出土しないが、鉄器の木製の柄が多数出土する 」
  - 「 石器出土数に対する砥石数が急速に増加し、石器が減少し、鉄器の研磨が急速に増加したことが推定される 」
- との考え方である。

この時代 近畿では 九州や 急速に 出土数を伸ばした日本海側山陰沿岸や安芸・吉備など瀬戸内沿岸に比しても 鉄器の出土数が少ない。そして トピック的な大型鉄器も出土していない。  
 記事はけいさいしたもの この「幻の鉄器」の時代・「卑弥呼の登場前の近畿地方の集落では 急速な鉄器化が進んでいた」との考え方には どうもじっくりゆかず、この疑問について本資料にまとめました。

図 弥生時代県別の鉄器出土数

弥生の後期 九州各地に加え 山陰・安芸・吉備での鉄器出土が増加するが、近畿での出土数は依然として少ない



地図1 県別にみた鉄器の出土数

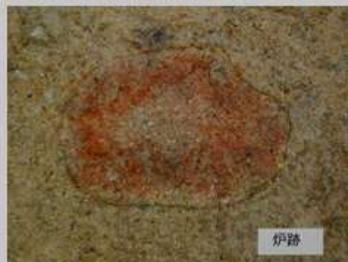
鉄器は弥生時代を通じて圧倒的に北部九州に集中する。3世紀初めにヤマト王権が誕生してもいぜんこの傾向は変わらないが、東日本にも普及しはじめる。この直後、3世紀後半以降の定型化した前方後円墳からの大量の鉄器副葬によって九州と近畿の鉄器量は逆転する(寺沢薫氏による説明。地図1は、川越哲志編『弥生時代鉄器総覧』(2000年刊)を一部時期補正して寺沢薫氏が作成)

## 五斗長垣内遺跡の位置と遺構概要

弥生時代後期初め AD 20・30年頃からAD200年頃 後期末まで 淡路島北部 津名丘陵の西側 播磨灘を望む海岸から約3km入った 標高200m播磨灘を見下ろす南北の尾根筋の西面から東西に延びる枝尾根上 南北 約50m 東西約500mの範囲で約170年間継続的に維持された集落遺で、23棟の竪穴住居のうち13棟に鍛冶遺構がある国内最古・最大級の鍛冶工房村遺跡。



五斗長垣内遺跡 遺構配置図 (※赤色が炉跡のある建物跡)



五斗長垣内遺跡の遺構配置図 赤○内の数字は 遺跡出土建物跡を約30年刻みに5期に分けて時代を区分した数字  
伊藤宏幸氏(淡路市教育委員会)講演より



淡路島・西日本最大級の鍛冶工房村 五斗長垣内遺跡 出土した鉄器(下左)と鉄素材・鉄切片(下右)

この「幻の鉄」の考え方は次の古墳時代には日本の中心になってゆく近畿にも 日本海沿岸地域と同じく 弥生時代後期には急速な鉄器化鉄器の集積があったのではないかと…との考え方である。

「鉄器は腐食で土に帰ってゆくため、出土せず、鉄器の木製の柄が多数出土する」事実や

「鉄器出土数に対する砥石数が急速に増加し、鉄器の研磨が急速に増加したことが推定される」事実を紹介し、

「鉄が出土しないが鉄器が急速に普及していったことが読み取れるとした『幻の鉄器』の時代」の存在の可能性を紹介した。

しかしながら、「幻の鉄」の時代といわれるこの時代に 西日本大級の鍛冶工房村とみられる「淡路島 五斗長垣内遺跡」が発掘され、そこから出土した鍛冶炉は近畿の鉄器の時代を象徴するには どうもぜい弱であり、出土鉄遺物も小さくて薄いものが主で 時代を引っ張るような鉄器は出土していない。

五斗長垣内遺跡で多数出土している鍛冶炉はすべて防湿構造がなく床面に直接火床がある炉で、

高温保持が難しく、大型鉄器の鍛冶加工が行われた痕跡はみられない。薄い素材の鑿切加工が主であったとみられる。

また、出土した鉄遺物は薄い鉄素材を鑿切加工した鉄鏃など薄い小型鉄器や薄い鑿切の鉄破片などが主である。

一点厚い大きな板状鉄斧が出土しているが、この五斗長垣内遺跡の鍛冶炉では この大型素材を加工できる高温に保持することは難しいというのが専門家の人たちの考え方である。

次の古墳時代には大和・近畿が主役となって大和王権が構築され、前方後円墳など大規模な土木工事が行われ、大規模国土開拓や古墳工事などには大型鉄器の農耕具・工具が必須不可欠であり、この時代が来る前にはすでに急速な鉄器化が近畿で起こっていたと考えるのですが、次の時代に通じる大型の鉄器・農耕具など厚さのある立体的な高温鍛冶加工を可能とする大々的な鉄器加工工房のイメージからは遠く離れている。ギャップが大きすぎるのである。

冷静にこの時代を振り返ると、

近畿での鉄器出土数が少ないばかりだけでなく、大阪湾沿岸で数多く繰り広げられた弥生の戦さによる殺傷痕のある人骨に刺さっていた鏃は石鏃や青銅製がほとんどで、この時代にあった弥生の戦の主武器として鉄鏃が広く戦に使われたとも言い難い。「鉄が土中にうずまっている間に錆によって 土に帰るため、出土しない。」また、「実用鉄器はすぐに再加加工され実用されるため、出土しない」とする考えもある。しかし、そうだとしても この状況は近畿のみならず、日本列島全部同じであり、一番さびて 土に帰りやすい薄い鉄鏃が数多く出土しているのである。

また、弥生の集落で出土してくる鉄の遺物などを見ると 依然として農耕具の主役は石器であり、弥生時代が「鉄の時代」とはいいがたいのではないか???

弥生時代後期 2・3 世紀 鉄器は出土しないが、「近畿地方では 急速な鉄器化が進行した「幻の鉄器」の時代それを促す大鍛冶工房村が五斗長垣内遺跡」とする考えには疑問符を付けざるを得ない。

弥生後期 2・3 世紀頃の近畿の鉄器普及の実態はどうか・・・事実はどうなのでしょう・・・

また、この時代に淡路に出現した大鍛冶工房村五斗長垣内遺跡の位置づけを含め、即断は無理なようだ。

ちょうど 1 月 30 日 明石で「鳥取発! 弥生文化シンポジウム『とっとり倭人伝 鉄のみち 明石海峡と日本海』」があり、弥生時代後期 大量の鉄器を蓄積した日本海側 妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡と淡路島五斗長垣内遺跡を結び 弥生時代後期の鉄の道を検討するシンポジウムがあり、新しい知見を得て、近畿地方の弥生時代後期の鉄を考えるよい機会となりました。



これらの知見も入れ、弥生時代の鉄器について考えるとやはり本当に実用鉄器が日本列島全体に普及するのは古墳時代近畿に「幻の鉄の時代」はなかったのではないかと・・・と。

弥生時代後期 大量の鉄器を蓄積した日本海沿岸山陰の妻木晩田遺跡 青谷上寺地遺跡並びにと淡路島五斗長垣内遺跡を結び 弥生時代後期の鉄の道のシンポジウムで得た知見・スライドなどを以下に紹介し、弥生後期 卑弥呼登場前夜の鉄についてフォローさせていただきます。



「鳥取発! 弥生文化シンポジウム『鉄のみち 明石海峡と日本海』」  
高尾浩司氏討論スライドより 2011. 1. 30.

硬い大型鉄素材を加工するには 高温保持が可能な鍛冶炉技術など高度な鍛冶加工技術が必要で、朝鮮半島・中国に近く、交流のあった北部九州周辺のみが、稚拙ではあるが、その技術が伝えられたのであろう。

このため、独自のルートを持たぬ北部九州をのぞく他の地域での鉄器製造は中国・朝鮮半島からの小型鉄素材の加工や薄い板状鉄素材の鑿切加工が主であったと考えられる。

朝鮮半島・中国に近い北部九州では比較的距離の近い大陸・朝鮮半島との交流により、限定的とはいえ、豊富に鉄器・鉄器素材が供給され、鉄器に関連する高度な技術情報も入ってきたと考えられる。しかし、北部九州から離れるにしたがって、それらのすべてがさらに先細り、鉄器の普及が進まなかったと考えられる。

鑄造鉄斧などの素材である鑄鉄は硬くて脆いため、そのまま鍛冶加工できない。

しかし、中国では早くから高温加熱して、表面から脱炭して柔らかく韌性のある脱炭鑄鉄にする技術が開発実用され、鉄素材として用いる技術がすでに開発されていた。

日本に伝来した鑄造鉄斧もそんな表面処理がなされていたものがあるが、大型素材であるため、高温保持が十分行えない鍛冶加工技術では無理であった。

ただし、脱炭鑄鉄の小型・棒状素材は北部九州や独自ルートを開拓した日本海沿岸諸国を通じて搬入され、この素材を使った小型鉄器・工具の製作が一部行われた。

朝弥生中期後葉に北部九州ではヤリガンナや鉄鎌などの鍛造鉄器がいち早く普及し、高度な鍛冶技術を獲得し、大形鉄器の製作を行うことができるようになったようだ。しかし、鉄器素材の流通・鉄器加工の技術情報を北部九州に独占隠匿されたそれ以外の地域では大型で高品質の鉄器素材はもとより、高度な加工技術そのものも獲得できなかったと考えられる。

村上恭通氏らの研究によると弥生中期後葉以降 北部九州では明瞭な掘形をもつ防湿構造のある鍛冶炉がみられ、この高温を保持ができる炉を得て、高度な高温鍛冶による大型鉄器が現れてくる。

しかし、その他の地域では 大多数の鍛冶炉が、防湿構造がなく 床面に直接火床がある鍛冶炉しかみられず、しかも 一部不完全ながらも薄い掘り込みのある鍛冶炉も時代と共に床面を直に火床とする鍛冶炉に退歩する。

また、この北部九州の防湿構造のある鍛冶炉さえもが、弥生時代が進むにつれ、退歩してゆく。

掘形をもつ防湿構造のある火床・鞆を有する本格的な鍛冶炉が広く現れてくるのは古墳時代になってからである。

その原因の一つには 鑄造鉄斧など鉄器の伝来は弥生時代の前期にまでさかのぼれるにしても、日本に鉄器が供給されるルートは一部の中国・朝鮮半島からにかぎられ、鉄を造る技術「製鉄技術」や「大型鉄器なども作れる高度な鉄器加工技術」は大陸側 そして北部九州で厳しく制限されていたためであろうか。

また、弥生時代の後期 戦乱に見舞われ、鉄器・鉄器素材の流通は益々先細りになっていったのも原因と言えようか…

この時期 中国・朝鮮半島は戦乱に巻き込まれた時代であり、日本への供給がままならぬ時代であったとも考えられる。

鉄素材・鉄器技術の供給地から遠く離れた近畿での実用鉄器の普及はまだまだ思うに任せない時代であったと考えられる。

しかし、魏志倭人伝など中国の史書に書かれた日本と朝鮮半島・中国の交流史によれば、弥生時代「鉄」の重要性が強く認識されていたことは疑う余地はない。

そして、弥生の終末期から古墳時代にかけて、この大陸の鉄を求める西日本・瀬戸内の国々は連合して邪馬台国連合・初期大和王権をつくり、北部九州から鉄の覇権を奪い取り、日本国家形成へと進んでいったとのシナリオが最近では 広く語られるようになってきた。

近畿にこの動きが出てくる弥生の終末・古墳時代の始まりまで、近畿で農具など広く鉄器が実用される状況はどうもなかったようだ。2・3世紀畿内は「幻の鉄」の時代として鉄器が集落内で広く使われたと結論付けることはできず、弥生時代 最大級の鍛冶工房村 五斗長垣内遺跡の位置づけを含め、まだまだ議論のあるところであろう。

2011. 1. 30. 近畿の2・3世紀 幻の鉄の時代について

『とっとり倭人伝 鉄のみち 明石海峡と日本海』シンポジウムを聞いて

by Mutsu Nakanishi

【参考まとめ 添付資料】

1. 弥生時代 西日本特に日本海沿岸地域を中心とする鉄器 野島永氏「弥生・古墳時代における鉄器文化」より
2. 写真紹介 西日本・近畿 弥生の鍛冶工房遺跡並びに 近畿 弥生の鉄  
[鳥取発! 弥生文化シンポジウム『鉄のみち 明石海峡と日本海』  
村上恭通氏ほか 討論スライドより 2011. 1. 30.]
3. 高尾浩司氏 「鉄器文化の伝わった道」-とっとりネット「とっとり弥生の王国の謎をさぐる」より-

【参考・まとめ資料】

1. 【和鉄の道・Iron Road】弥生後期から卑弥呼の時代へ ペールを脱いだ「弥生の Iron Road 和鉄の道」 2010. 11. 21.  
◆ <http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/10iron14.pdf>  
◆ <http://www.infokkna.com/ironroad/2010htm/iron6/1012gossa00.htm>
2. 野島永氏 「弥生・古墳時代における鉄器文化」
3. 高尾浩司氏 「鉄器文化の伝わった道」-とっとりネット「とっとり弥生の王国の謎をさぐる」より  
<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=32826>



次のページに まとめに使った資料を収録しています

添付 まとめ 1 弥生時代 西日本 特に日本海沿岸地域を中心とする鉄器の普及  
野島永氏「弥生・古墳時代における鉄器文化」より

添付 まとめ 2 写真紹介 西日本・近畿 弥生の鍛冶工房遺跡並びに 近畿 弥生の鉄  
「鳥取発! 弥生文化シンポジウム 『とっとり倭人伝 鉄のみち 明石海峡と日本海』  
村上恭通氏ほか 討論スライドより 2011. 1. 30.  
代表的な淡路島 五斗長垣内遺跡 青谷上寺木遺跡・妻木晩田遺跡の写真は省略

添付 まとめ 3 高尾浩司氏 「鉄器文化の伝わった道」  
-とっとりネット「とっとり弥生の王国の謎をさぐる」より-

【 添付 まとめ 1 】

弥生時代 西日本 特に日本海沿岸地域を中心とする鉄器の普及

野島永氏「弥生・古墳時代における鉄器文化」より

弥生時代中期の丹後地域では、水晶や碧玉、緑色凝灰岩を素材とした勾玉や管玉、小玉などの製作を開始。京都府京丹後市奈具岡遺跡（河野・野島 1997）で作られた玉製品は丹後の地域社会のなかで消費されたわけではなく、その大部分が贈答用の装身具として特別に生産されたものであったと想定できる。前漢で生産された鉄素材（鑄鉄脱炭鋼）の存在（大澤 1997）からは、海上交易によって日本列島では得られない鉄資源を入手していたことがわかる。

この鉄素材をうまく加工して玉生産や木器生産に利用し始めた（野島・河野 2001、村上 2005）。

後期になると、日本海沿岸各地域の首長達は貴重財を原料とした手工業生産の管理を行うことによって経済的な特権を獲得し、潟湖を拠点とした海上交流を通して中国大陸や北部九州をはじめとした日本海沿岸諸地域との交易に成功した。（たとえば妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡）

その結果、瀬戸内海や近畿地方よりも鉄製武器や工具の出土数が上回ることとなる（図 5.5、図 5.7）。

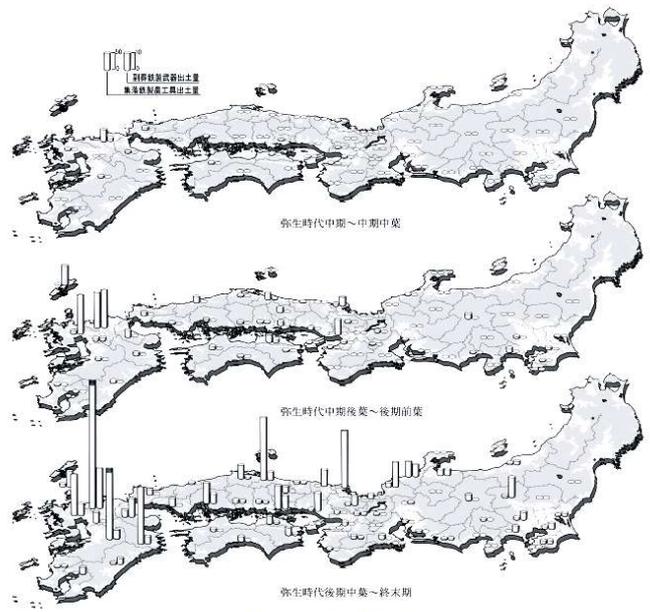
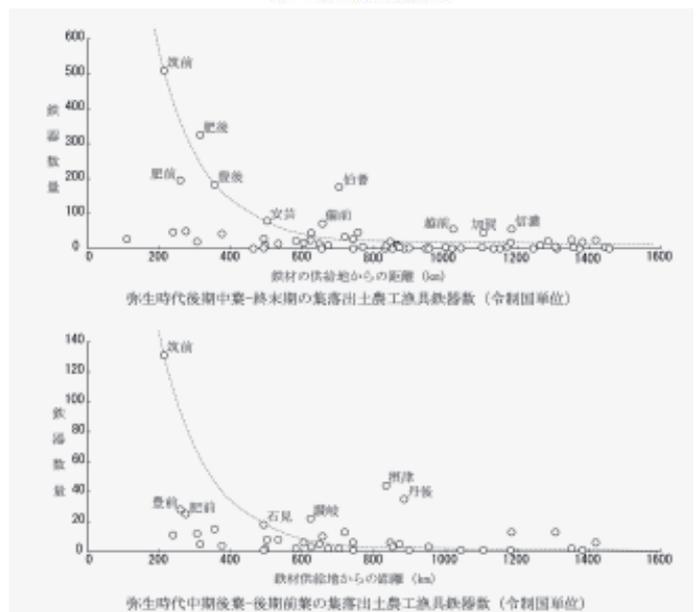


図 5.5 弥生時代の鉄器出土量



鳥取県 妻木晩田遺跡の出土鉄器



鳥取県 青谷上寺地遺跡出土鉄器



青谷上寺地遺跡出土船載遺物

青谷上寺木遺跡・妻木晩田遺跡にみられる朝鮮半島産鉄斧のように北部九州地域以外に分布する鉄器は朝鮮半島との直接交易路が存在した可能性を示す。

また、北部九州を除く 他地域での出土鉄器の大半が鉄鏝であるのに対し、両遺跡では 鉄鏝は少なく 多種多様な鉄器(農工具)が出土し、集落や周辺地域で使うというより、日本海沿岸 そして 山を越えた瀬戸内地域との交易品としての様相がある。また、妻木晩田遺跡には鍛冶工房が出土し、妻木晩田遺跡で鉄器加工を行っていたことが明らかになりつつある。

日本海沿岸では 潟湖という天然の良港が点在し、それを最大限に活かした交易が独自の鉄器文化を生み出していったと考えられている。

参考 野島 永氏 「弥生・古墳時代における鉄器文化」  
 高尾浩司氏 とっとりネット「とっとり弥生の王国の謎をさぐる」—鉄器文化の伝わった道—  
<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=32826>

### 鑄造鉄斧再利用の実態②

- 鑄造鉄斧の表面処理による恩恵＝脱炭(だったん)処理

※脱炭処理  
 鉄斧表面の炭素を減らして刃物としての柔軟性をもたせる熱処理。炭素分が高く硬い反面衝撃に弱く脆いという鑄造鉄斧の弱点を補い機能性を高める。

◎当時のハイテク技術

青谷上寺地遺跡出土鑄造鉄斧(弥生時代後期)

### 鑄造鉄斧片再利用の実態

- 石器の製作技術による加工  
 → 擦り切る・割る・磨く

大塚原立遺跡(弥生文化博物館)の調査(出雲・石見・福島の弥生文化)より(2009年夏季特別公開資料)より転載

青谷上寺地遺跡出土小型板状鉄斧(鑄造鉄斧再利用品)

青谷上寺地遺跡 鑄造鉄斧破片の再利用 (模式図)

### 青谷上寺地出土鉄器にみる当時の鉄器製作手法(技術)

「鳥取発! 弥生文化シンポジウム 『とっとり倭人伝 鉄のみち 明石海峡と日本海』  
 高尾浩司氏討論スライドより 2011. 1. 30.

【 添付 まとめ 2 】

写真紹介 西日本・近畿 弥生の鍛冶工房遺跡並びに 近畿 弥生の鉄

「鳥取発! 弥生文化シンポジウム 『とっとり倭人伝 鉄のみち 明石海峡と日本海』

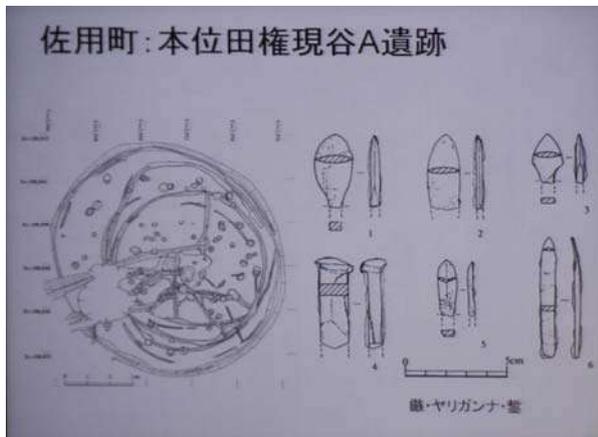
村上恭通氏ほか 討論スライド より 2011. 1. 30.

代表的な淡路島 五斗長垣内遺跡 青谷上寺木遺跡・妻木晩田遺跡の写真は省略



弥生後期末 山陰地方最古の鉄器製作工房跡

弥生時代後期末大阪府星丘遺跡 II類の鍛冶炉(写真インターネットより)



弥生時代後期後半の本位田権現谷A遺跡 (佐用町)

西京極遺跡 弥生時代後期 (1世紀後半～2世紀初め) の鍛冶炉跡



弥生時代後期中葉の拠点集落玉津・田中遺跡

頭高山高地性集落遺跡の鉄

弥生時代の明石川流域の集落から出土した鉄



II 三田盆地の遺跡から出土した弥生の鉄

シンポで紹介討論された内容掲載していませんが、上記資料を見る視点として 頭に残っていることは下記のとおりです。

1. 弥生後期 近畿に現れた鍛冶炉も時代が下がるにつれ、退化の傾向がみられそうである。
2. 近畿の弥生の鉄器は 海岸沿いというより、高地性集落や三田など内陸部より出土する鉄に着目

## 【 添付 まとめ 3 】

とっとりネット「とっとり弥生の王国の謎をさぐる」

鉄器文化の伝わった道 高尾浩司（鳥取県埋蔵文化財センター）

<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=32826>

「とっとり弥生の王国」の特徴を示すものの一つに全国屈指の出土量を誇る鉄器があります。今回は鉄器の伝わった道と山陰弥生社会に花開いた独自の鉄器文化について探ってみましょう。



### 鉄との出会い

鉄器は稲作とそれに伴うさまざまな農具と同じように、朝鮮半島から日本へ伝わりました。弥生時代初め、北部九州に伝わった鉄器はまだわずかで、ごく一部の人が手にできないものでした。やがて稲作文化が日本各地に定着したころ、中国が戦国時代をむかえ国内外が動乱した影響で、朝鮮半島製青銅器とともに中国製鉄器が日本に流入するようになりました。それらを独占した北部九州の有力者は、権威を表すものとして良質の管玉・勾玉を欲し、日本海を渡り山陰や北陸と交易を行ったようです。 潟湖に接した海辺のムラ・青谷上寺地遺跡は、その交易ルート上に位置する重要な寄港地だったのでしょう。

山陰・北陸地方で最も古い中国製鉄器（写真①、約2300年前）は、そうした背景のもとで獲得されたと考えられます。いち早く鉄に触れた青谷上寺地の人々はその効用に感嘆し、ものづくりの有効な道具として強く意識するようになったと思われる。



写真① 山陰最古級の鉄器  
（鑄造鉄斧破片・青谷上寺地遺跡）

### 中国製鉄斧の入手と使用

日本に伝わった初期の鉄器は中国製で、溶かした鉄を鑄型に流し込んで造った鑄造の斧がほとんどでした。それらは木を伐採するのに絶大な威力を発揮しました。また、たとえ割れて破片になってしまっても、一辺を砥石で磨き刃をつけ、ノミや小型の斧として再利用されました（写真②）。

こうした工夫は弥生時代の石器にもみられるもので、倭人が考え出したリサイクル方法といえます。鑄造された鉄斧は炭素をたくさん含むために堅い反面、衝撃に弱くて壊れやすい特徴があり、これを補うために表面の炭素を減らして柔軟性を持たせる”脱炭処理を施していました。青谷上寺地遺跡の鑄造鉄斧を分析したところ、やはり表面に脱炭処理を施した痕跡がみられました（写真③）。初期の鉄器使用を可能にしたのは先進地・中国の高度な技術と倭人の知恵だったのです。



写真② 鑄造鉄斧と破片の  
再利用品（青谷上寺地遺跡）



写真③ 鑄造鉄斧の断面  
（銀色に輝く鉄の周囲にみられる黒灰色の膜状の部分が脱炭層・青谷上寺地遺跡）

### 二つの交易ルート

破片となった鑄造鉄斧を再利用するかたわら、約2000年前には青谷上寺地遺跡で鉄器が製作され始めました。あらかじめ用意された棒状・板状の鉄素材を炉で熱して軟らかくし、打ち延ばしたり、切ったり曲げたりする鍛造という方法で小型の斧などを製作したようです。弥生時代の鍛造用鉄素材は中国あるいは朝鮮半島で造られたもので、鑄造鉄斧も含め日本海を通じた北部九州との交易によって入手したほか、石器石材とともに瀬戸内地方からも入手していたようです。青谷上寺地遺跡の朝鮮半島製板状鉄斧（写真④）とよく似た鉄斧が、伯耆町・永山馬籠遺跡など山間部を抜ける交通の要衝にある集落遺跡でも出土しており、当時は鉄を入手する2つの交易ルートがあったと考えられます。



写真④ 朝鮮半島製鉄斧  
（青谷上寺地遺跡）

## 山陰弥生社会と独自の鉄器文化

少し遅れて、丘陵上に集落を営む妻木晩田遺跡でも鉄器を製作するようになります。交易で得た外国産素材から作られた地元製品と、九州から運ばれた製品、そして少数の外国製品という鉄器の組み合わせは青谷上寺地遺跡も同じで、両集落が最盛期を迎える頃(約1800年前)には、他に例を見ないほど多数の鉄器を保有するまでになります(写真⑤)。同じ頃、朝鮮半島で鉄器の生産がさらに活発となって倭国内での鉄器の流通量が増え、鉄の効用が広く知られるようになったことで、木製農工具の多くに鉄製の刃が付けられました。その結果、日本海沿岸ルートでの交易の比重が大きくなり、山陰は周辺地域との関わりを深めていきました。特に北陸は鉄と交換する玉材の産地であり、高杯に代表される木製容器や鉄器・玉の製作技術に共通点が見られることから、強いつながりがあったことがうかがえます。当時のリーダーには次第に高まる鉄の需要を満たすだけの供給量を確保することが求められましたが、北部九州を窓口とする交易だけでは十分な量は賅えなかったことでしょう。

そのため、北部九州を仲介しない朝鮮半島との交易を試み、鉄器を獲得しようとしたと考えられます。青谷上寺地遺跡の大型鉄斧(写真④上)や妻木晩田遺跡の踏み鋤(土堀具)など、北部九州でも出土していない朝鮮半島製鉄器がみられ、大刀などの大型武器が日本海沿岸地域の王墓に副葬されることも朝鮮半島との交易を示しているのではないのでしょうか。「とっとり弥生の王国」には潟湖という天然の良港が点在し、それを最大限に活かした交易が独自の鉄器文化を生み出していたのです。



写真⑤ 鉄製農工具(妻木晩田遺跡)



青谷上寺地遺跡復元鉄器  
(愛媛大学・村上恭通教授製作)

[とっとりネット「とっとり弥生の王国の謎をさぐる」](#)

<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=32826>

文=高尾浩司(鳥取県埋蔵文化財センター)